

パーキンソン病の話

ドパの効き目が短くなる話1:ウェアリングオフ現象

ドパの効き目は元々短い

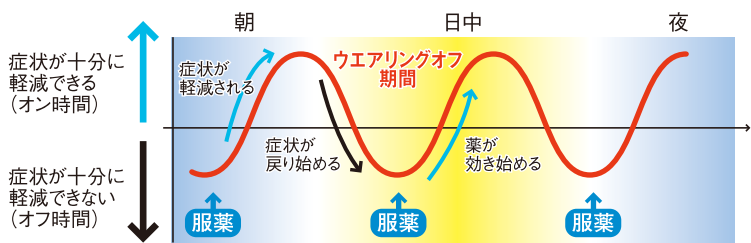
パーキンソン病では脳内のドパミンが不足しています。ドパミンを飲むと脳の中へ入っていきません。有害なものは脳の中に入っていないシステムがあります（血液脳関門といいます）。そこで、脳の中へ入っていき、ドパミンになるドパ（またはレボドパと呼びます）を薬として投与します。これはパーキンソン病治療の歴史上最も画期的なもので、未だに症状の改善効果ではドパを上回る薬はありません。しかし、効果の持続時間は飲み始めでは4、5時間ですが次第に短く不安定にな

ります。薬の効果持続時間は一般には薬の濃度の半減期（時間）で分かります。ドパでは60〜90分です。一方、ドパミンアゴニスト（ビ・シフロール、レキップ）では5、6時間です。最近ではドパミンアゴニストでは徐放剤（ミラペックス、レキップCR）が作られており1日1回の服薬で従来3回飲んでいると同等の効果が得られます。便利な一方で、朝1度でよい薬が増えていきますので毎朝10錠前後の大量の薬を飲むという状態になりかねません。

ウェアリングオフ現象とは

薬の効き目が短くなったと感じ

るのはドパを飲み始めて通常は3、4年を経過した頃からです。それまでは1日3回食後ドパ服薬で効果は十分にみられます。効果が短くなると身体の動きが悪くなりますが、それ以外に身体の中のドパミンが減っていくに伴い表のようないろいろな症状が出てきます。このようにドパを飲んでいられる際にみられる、1日の間での何度もみられる症状の変化をウェアリングオフ現象と呼びます（下図）。症状が良いときは「オン」時、悪いときは「オフ」時と呼びます。これは急に薬の効果が切れる「オン・オフ」現象とは異なります（次回以降で説明します）。



ドパの効果切れる時の症状

運動症状	すくみ足、ふるえ、動作緩慢、バランス不良	精神症状	気分がふさぎ込む、意欲低下、不安感
自律神経症状	動悸、息切れ、身体のはてりや寒気など	痛み	手足の痛み、痺れなど